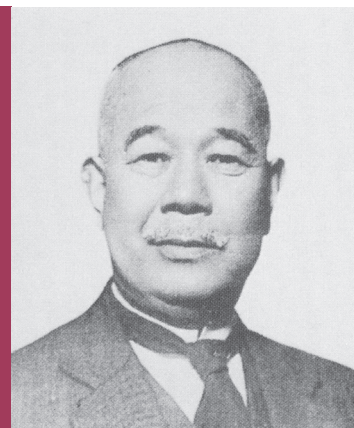


俵 国一 小伝

Kuniichi Tawara



俵国一氏は、明治5年（1872年）島根県浜田に出生、同30年東京帝国大学工科大学探鉱冶金科を卒業、助教授に任命された。同32年にはドイツに留学、フライベルグ大学で鉄冶金学を修め、35年欧米諸国を経て帰国、東京帝国大学教授に任じられ、鉄冶金学講座を担当、翌36年工学博士の学位を授与された。大正12年には東京帝国大学工学部長に選ばれ、同14年には帝国学士院会員となり、昭和7年東京帝国大学を定年退職し、名誉教授の称号を受けられた。

この間氏は、日本に初めて金属顕微鏡を導入して鉄鋼の顕微鏡組織を研究し、いわゆる金属組織学を国内各方面に広められた。また古来の砂鉄製錬法を詳細に調査するとともに日本刀の科学的研究に着手、精魂を打ち込まれた。この日本刀の科学的研究に関する業績に対しては大正10年帝国学士院賞を授けられた。

氏は当時まだ黎明期にあったわが国の鉄鋼業及び技術の育成発達を計画され、野呂景義氏、今泉嘉一郎氏および香村小録氏など志を同じくする者と協力して、大正4年日本鉄鋼協会を創立し、大正11年に第4代会長、昭和5年に第8代会長と二度も会長の重任を負い、本会の事業発展に尽力し、今日の隆盛の基礎を確立された。

また大正15年には日本鉱業会の会長に選ばれ、そのほか日本工学会理事長、日本金属学会など多数の学協会の役員を兼ね、また工学院大学理事長、学術研究会議議員、その他の学術研究委員会に委員長または委員として参加し、わが国の科学技術の進歩発達に非常な貢献をされた。

昭和21年には、氏が長年にわたって努力された日本刀の研究および鉄鋼に関する学術技術の進歩に尽くした功績により文化勲章を授与され、さらに昭和26年には文化功労者に選ばれた。

昭和7年、氏が東大教授を退かれた後、最も力を入れられたものは日本学術振興会における仕事である。すなわち、昭和9年日本学術振興会第19（製鋼研究）委員会を、同18年第54（製鉄研究）委員会を創設し、その委員長として昭和25年まで両委員会の事業遂行に献身的努力を払い、目覚ましい活躍を続けられた。

氏は、昭和20年4月小石川駕籠町において被災後熱海に移られ、来ノ宮の別邸で晩年を過ごされたが、31年鎌倉に移られ、33年7月30日逝去された。享年86才。

昭和7年、氏が東大教授を定年退職した際、門人知人が相計って記念資金を募集したが、昭和9年その資金の一部を俵博士功績記念会委員総代の名をもって、日本鉄鋼協会に寄付されたので、本会では俵博士記念資金取扱規則を設け、この資金より生ずる利子をもって毎年俵（論文）賞を贈ることにした。

その後本会はこの記念資金事業とは別に、創立50年を記念して新しい俵賞を設けて、同氏の遺徳を讃え、内外を問わず鉄鋼業の進歩発達または学術、技術の研究開発に画期的功績があり国際的評価があるものに授与することにした。

